

大阪工業大学 | 工学部 | 建築学科 | 2023年度 | 卒業設計作品集 OSAKA INSTITUTE OF TECHNOLOGY, DEPARTMENT OF ARCHITECTURE | DIPLOMA WORKS 2023

OSAKA
INSTITUTE OF
TECHNOLOGY



ARCHITECTURE

YEAR

Preface

卒業設計作品集 第49号

馬場望(建築学科長)

本学建築学科の卒業研究は、卒業設計と卒業論文のいずれかを選択することになっており、毎年その成果を卒業設計作品集や学科ホームページでとりまとめて公表しております。

この卒業設計作品集には、2023 年度の卒業設計のうち、入選作品 10 点を収録しております。 Jury Report をお読みいただければ、審査過程に加え、本学科の設計指導方針もご理解いた だけるのではないかと考えます。

ご高覧賜ります各位に、忌憚のないご意見とご指導をよろしくお願い申し上げます。

Contents

Finalist Projects

最優秀賞	地に溶け込む都市のうつわ	天場 啓人	01
優秀賞・大宮賞	共有する右脳的空間	堂山 湧生	05
優秀賞	日常の痕跡	吉本 楓	09
佳作賞	カブと私	藤田 萌花	13
佳作賞	共鳴する月の律動	成田 椋	17
佳作賞	獅子と境棲する集落	神山 響	21
佳作賞	七音相の再配符	山本 小蘭	25
佳作賞	備えて繋ぐ待合所	中安 瑞輝	29
佳作賞	多相的な窯元	石田 大起	33
佳作賞	琵琶道中 山湖景路	中島 聖弥	37

Jury Report 41

Finalist Projects



01 遺産の価値と保存

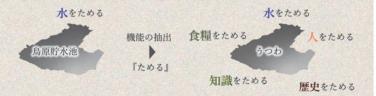
近代産業遺産は歴史教育の重要な場であり、遺産保存は歴史継承に不可欠である。土木分野も例外ではなく、多くのコンクリートダムが土木遺産として登録されているが、修復により元の姿を保つダムは少ない。

02 ダム遺産の保存問題

土木遺産としてのダムは<mark>貯水機能の必要性に基づき</mark>保存される。機能不要となれば、歴史 的価値があっても放置されることがある。したがって、ダムの価値に焦点を当て、土木遺 <mark>産として保存</mark>する必要がある。

03 ダムの新たな価値

ダムは、単なる<mark>貯水構造物以上の意味</mark>を持つ存在であり、地域の歴史や文化に深く根ざしている。ダムの歴史的価値を維持しつつ、新たな機能を組み込むことで、地域のシンボルとして「うつわ」を創造する。ダムは水を貯めるだけでなく、人々や食、歴史など様々な要素を「ためる」ことで、地域の文化や歴史を結集し、未来へ伝える重要な役割を担う。その結果、ダムは地域に根差した、半永久的なシンボルとしての価値を高め、継続的に重要性を発揮する。



04 立ヶ畑ダムと旧鳥原村

明治 38 年に建設された立ヶ畑ダムは、日本で 4 番目に古い重力式ダムで、1998 年に文化財に指定された。現在、補修から 110 年が経ち、4 つの土木遺産に登録されているが、将来的 に貯水機能が不要になる可能性が高い。

昔この地域は、美しい<mark>家屋と棚田</mark>が特徴の鳥原村があったが、ダム建設により<mark>水没</mark>した。現在は、水車業で使われた石臼が貯水池の護岸に残されている。







05-1 棚田の再構築

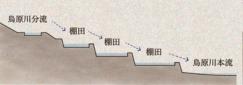
旧鳥原村の棚田の再構築を行い、かつて存在した棚田の景観を蘇らせる。

棚田を用いることで、地盤の強化・補強と自然への寄与に貢献する。さらに、建築を棚田の中に埋め込むことで、敷地周辺がひとつのうつわとして機能する。

05-2 ダムと棚田の3つの相乗効果

水利の効率的利用

貯水池の<mark>高低差</mark>を利用することで、効率的に棚田全体に水を 供給できる。



自然環境の保護

役目を終えたダム周辺に棚田を整備することで、<mark>自然環境の</mark> 保護を促進する。

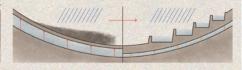
生態系の維持や地域景観の美化に貢献する。

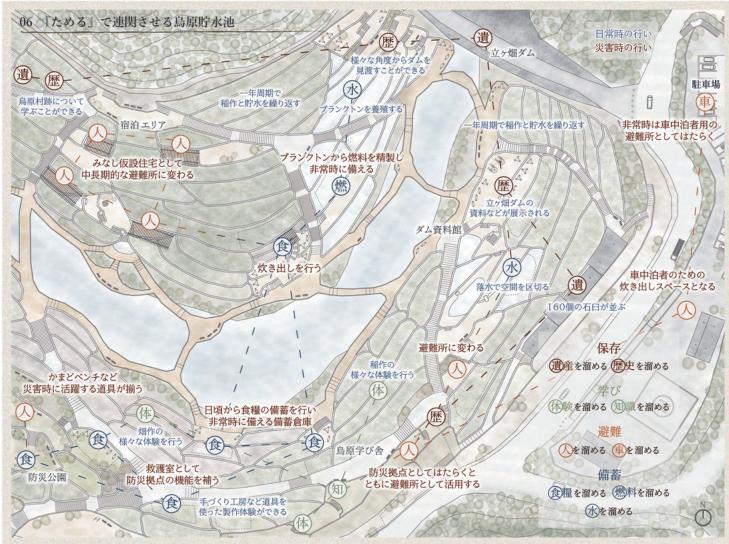


土砂崩れ、地すべりの防止

豪雨による<mark>地下水の急激な上昇</mark>によって土砂崩れ、地す べりの危険性が高まる。

棚田は一度水を保持するため、地下水の上昇を抑え危険性を減らす

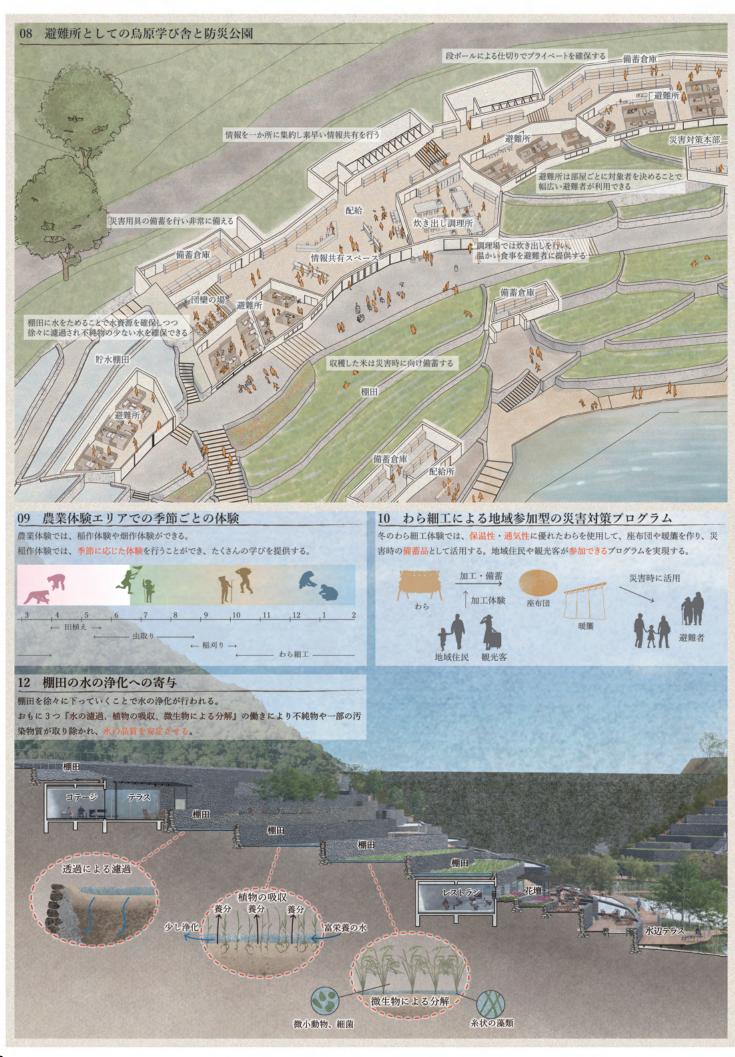




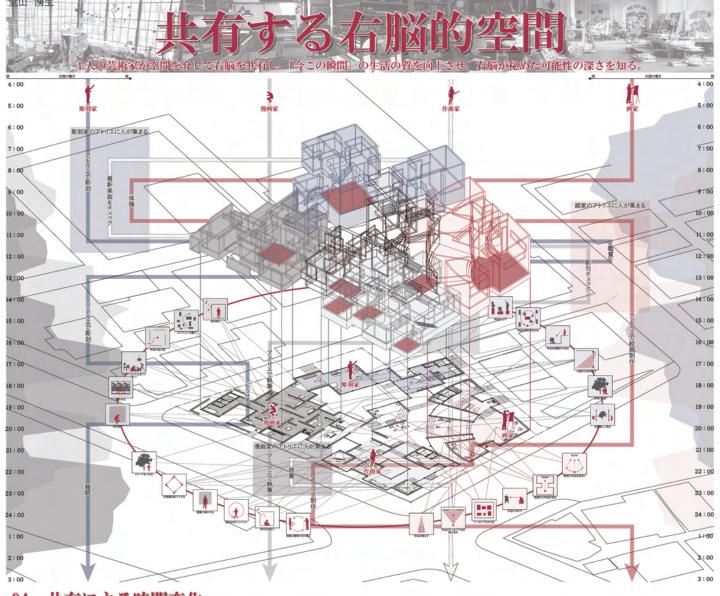
敷地内に鳥原学び舎、ダム資料館、宿泊施設、そして防災公園を計画する。

様々な『ためる』機能を連関させることで、烏原貯水池は日常時には遺産の保存や学び、さまざまな体験ができる<mark>複合施設として機能</mark>し、災害時には一つの <mark>防災拠点</mark>としての役割を果たす。









04 共有による時間変化

時間には垂直の時間と水平の時間がある。

水平の時間とは過去→現在→未来という一般的な時の流れのことである。対して、垂直の時間とは「いまここ」、「この瞬間」の深さ、高さのことである。つまり、 垂直の時間は過ごし方や、他人との関り合いによるものであり、右脳を共有しようとする働きが垂直の時間の過ごし方をより快適にする。

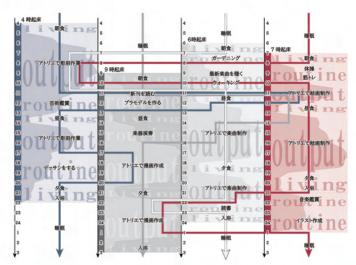
04-1 芸術家の一日

芸術家にはそれぞれの過ごし方があり、日によってスケジュールに変化がある。 これは芸術家それぞれのある一日を切り取った過ごし方である。

04-2 共有による暮らしの変化

4人の芸術家がシェアハウスで共同生活をする。

時間と空間を共有することで人が集まったり場所を変えたりすることで、それぞれの暮らし方に変化が加わる。



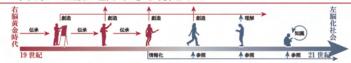
00 左脳と右脳 異なる思考回路

人間の脳は左脳と右脳とで思考パターンが異なっており、左脳は 論理的で言語が中心の論理的思考であり、右脳は感情的、芸 術的な働きをする感覚的思考である。



つまり、左脳はルールや法則をつくり、世界を単純化する。 一方、 右脳は世界を全体的にとらえ、 曖昧さや複雑さをもって共感を得 ようとする。

01 背景 左脳に偏りすぎる現代人



19世紀は情報やデータの入手が困難であり、自ら答えを求めて創造力を働かすことで右脳が活性化し、様々な分野で新しい物が生み出された多様性に富んだ時代であった。

しかし、技術の発展やルールの整備により<mark>多様性</mark>が失われ始めた現代では、自ら答えを求めることをやめ定式化されたものの繰り返すようになってしまった。<mark>多様性が右脳化の傾向であるのに対して、繰り返しは左脳化の典型的な兆候と言え、左脳化社会が出来上がってしまったのだ。</mark>

左脳化された社会で右脳の大切さを見直すことで、かつての右脳黄金時代のように探求心に 溢れた創造性豊かな社会を取り戻せないだろうか。

02 提案 建築空間の共有

右脳は相手の表情や行動を観察することで、相 芸手の思考を読み理解する。つまり、他人と共存 家することで右脳が自然と活発になる。

そこで4人の芸術家が空間を共有し、互いの生活 に干渉できるシェアハウスを計画する。



違う分野の芸術家たちがあつまることでそれぞれの右脳が昇華されるアトリエとなり、 互いに刺激し合いながら芸術性をたかめていく。



03 設計手法 脳番地による右脳空間

右脳の働きを昇華する空間をアトリエとして、4 人それぞれのアトリエを設計する。それらを一つ の敷地に配置することで、各アトリエを繋げる共 有部分で4人の要素が掛け合わされ、それぞれ のアトリエにはない右脳的空間が生まれる。

03-0 八つの脳番地の連携

人間の脳は八つの脳番地で構成されており、行動には必ず脳番地が働いている。

8 つの脳番地は、思考系、感情系、伝達系、 運動系、聴覚系、視覚系、理解系、記憶系であり、 1つの行動に対して1つの機能だけが働くわけで はなく、複数の脳番地が連動して働いている。 行動を脳番地に置き換えることで、脳の働きを 可視化する。

03-1 脳番地による分析

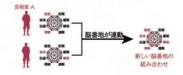
芸術家のアトリエや創作行動を観察し、右脳が働く要素 を抽出する。

それらを脳番地により右脳の働き方を可視化することで、 脳番地の働きが昇華するようにアトリエ空間を構成する。



03-2 シェアハウスの構築

4人それぞれのアトリエ空間を敷地に配置する。 各アトリエをつなげる共有部分は、4人の芸術 家の要素を組み合わせて構築する。





04-3 時間帯による過ごし方

朝 (8時~10時)

日が出始める時間帯から彫刻家が彫刻制作を行う。

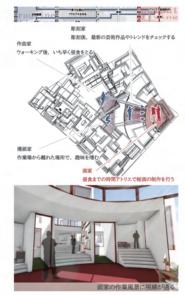
次いで、目が覚めた芸術家たちが朝 の支度を済ませに、明るく照らされ



昼 (11時~13時)

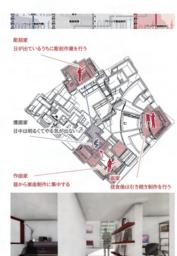
朝の支度を済ませた画家がアトリエにて描画活動を行う。

お昼時を過ごす芸術家たちの視線が、 画家の元に集まる。



夕方 (14時~16時)

それぞれがアトリエにて創作活動に 励むため、芸術家たちが建物中に散 らばるが、建物中に制作の音や視線 が飛び交う。



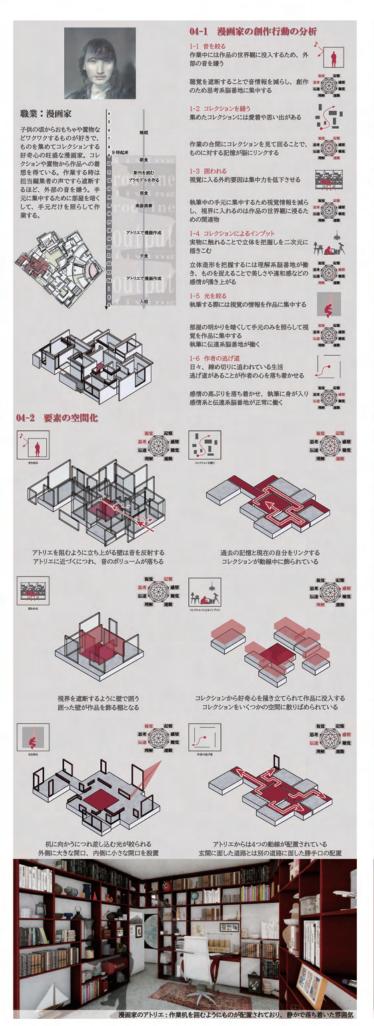
夜 (22時~24時)

漫画家は暗く静かなアトリエにて執筆 を行う。

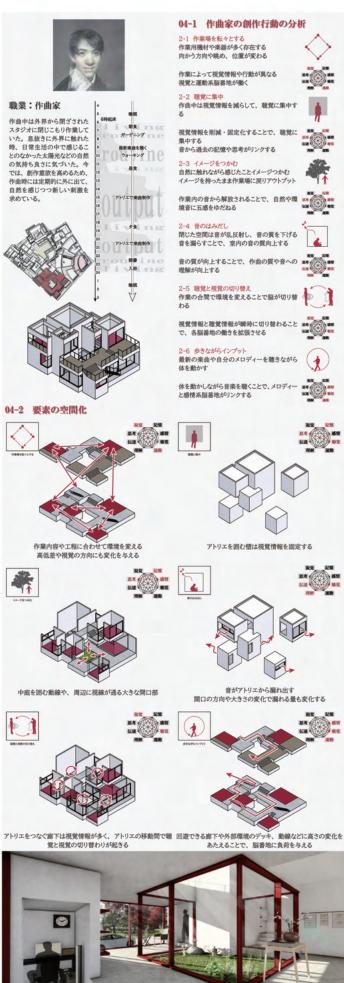
制作活動が落ち着いた芸術家たち が、趣味を嗜むために静かな空間に 人が集まる。



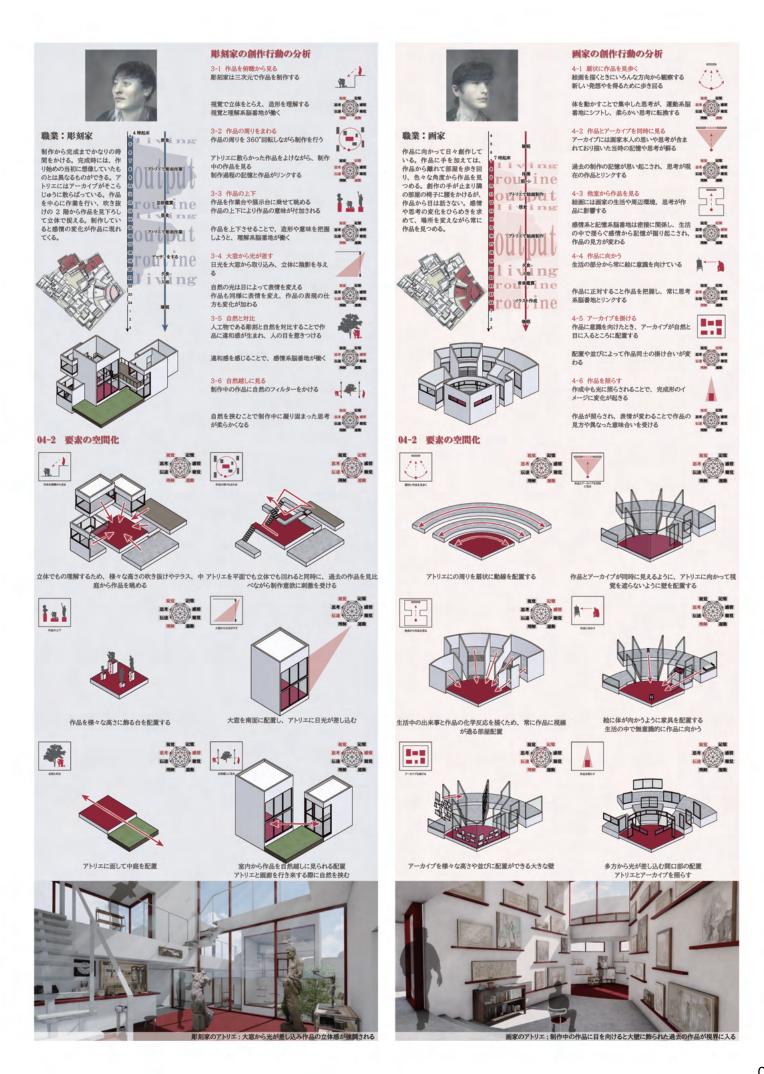


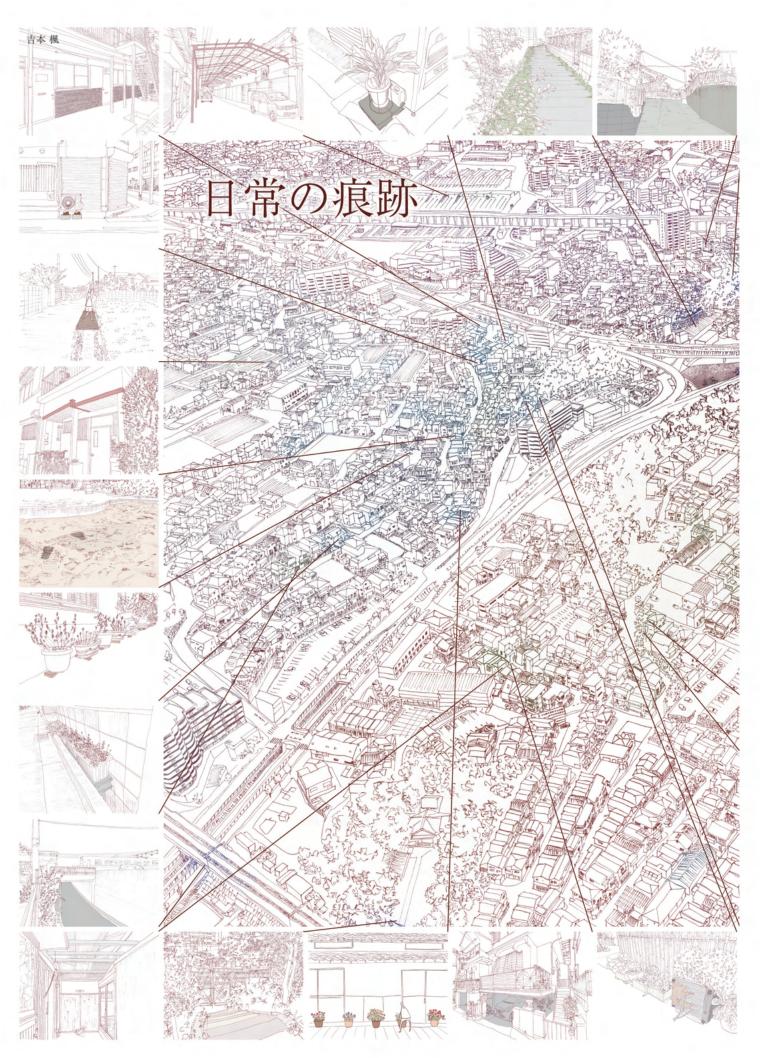


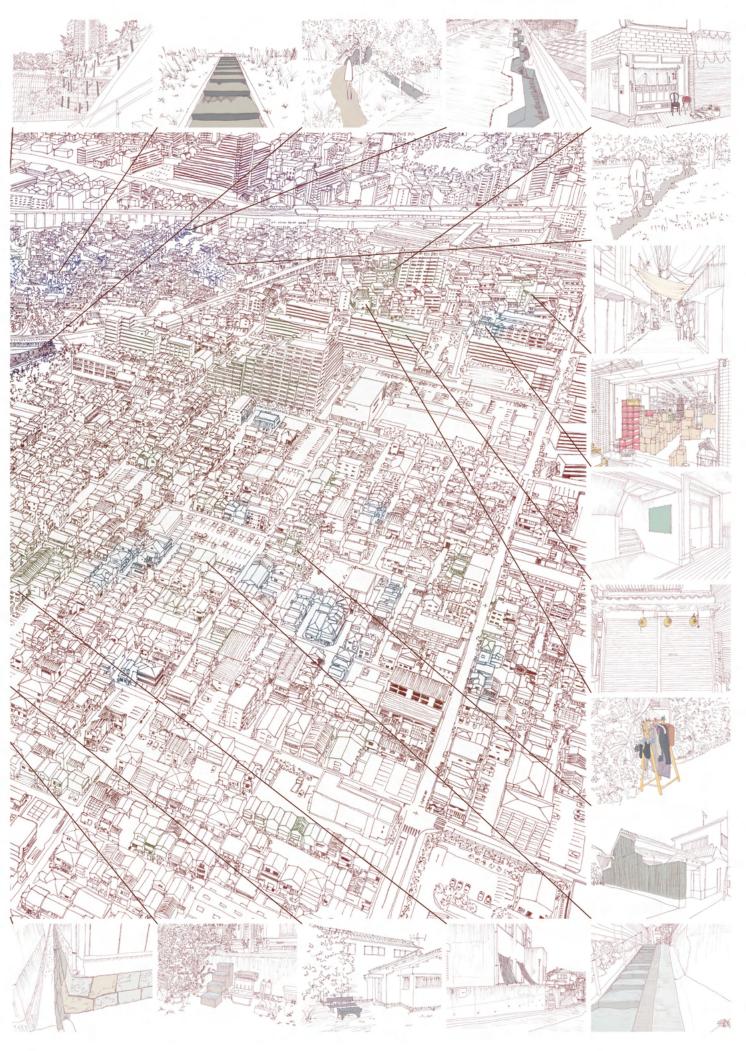




作曲家のアトリエ:音がはみ出す作業部屋を視線の抜ける廊下が繋いでいる







痕跡を残してきた西明石のまち

痕跡は人が無意識的に残した日常のしるしで ある。残された痕跡をみると人の行動を想像 することができ、痕跡を介した関係性が築か れる。

地域固有の伝統芸能や美術工芸品、お祭りな どは、長い時間をかけて受け継がれてきた。 その文化的な価値が見出され、残すべきもの として現在ではまちの交流を生み出している。 一方で、そのまちで生活する人が残した些細 なしるしは見過ごされている。

特筆して後世に受け継ぐべきものがないと思 われた住宅街であったが通勤通学をする人、 老後の生活を楽しむ人、近所の公園で遊ぶ人 など多くの人が生活をする中で痕跡を残して いることが分かった。



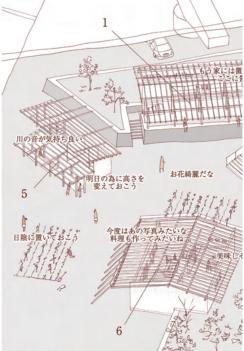


何もないと思われた住宅街

人々の生活のしるしを視座に 痕跡を辿ってみると あらゆる文化が見えてくる

普段当たり前のように存在しながらも意識し ないと見えないものが小さな気づきによって このまちの文化として残っていく。

痕跡を用いた空間



2. 階段下の通り道



等間隔に植物が植えられた階段の下は



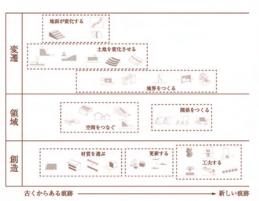
6. みんなの台所



痕跡を辿る

まちの痕跡をスケッチを通して観察する。





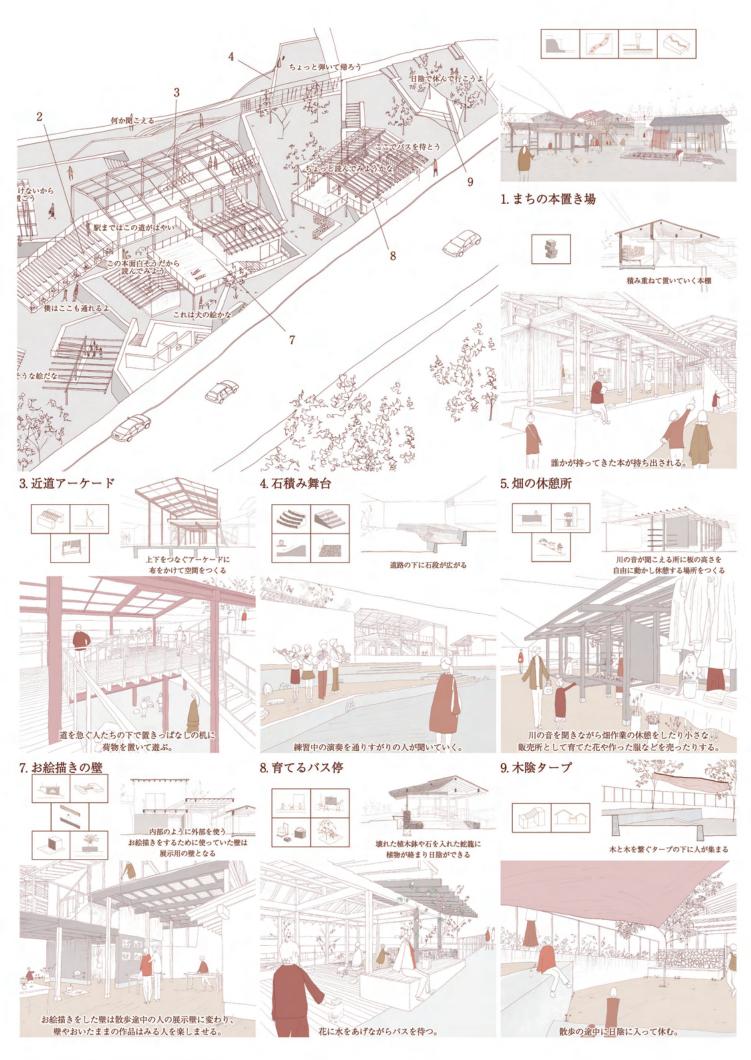
分析を進めると時間を超えて残る変遷的痕跡や空間をつくる領域的痕跡、周りのものを使いこ なす創造的痕跡の3つの痕跡に分類できた。

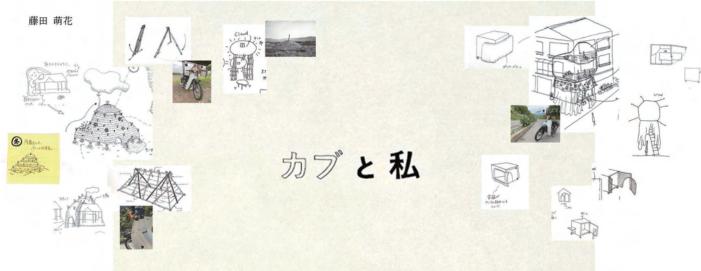
分類の結果を地図上に示すと、古くからある痕跡はまち全体に見られたが、新しくできた痕跡 はある地点で分断されていたことから、社会が文化を残すことや「綺麗な社会」を志向した一 方で文化の分断を見過ごされているエリアがあることが分かった。そこに、まちで見つかった 痕跡を用いて建築に応用することで痕跡を介した交流や行為によって新たにできた痕跡がこの 土地に文化を残していく。

誰かが残した痕跡を介した関わり

痕跡を媒体として間接的にまちの人が関わり合うことの出来る建築を提案する。







「旅人」としての私。

子供の頃、道草をしながら、近くの仲良しのおばあちゃんの家へ行くのは私の日課だった。 幼い私にとってそれは、「小さな族」だった。休学中の北海道で体験したアルバイトも、大阪 での暮らしも、私にとっての「旅」であり、日々の生活もまた、私にとっての「旅」となる。 私は、旅をしているのである。

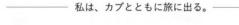
建築をたてたくない。

大学で建築を学ぶ中、私は建築をたてたくないと思うようになった。「建築という大きな 力で「土地と場所」に大きな変化を与えることに自信がない」ということが正直な気持ちで ある。4年間建築を学んだ私と今の私。私の卒業制作は、もう一度「私」と向き合うために 取り組んでいる。

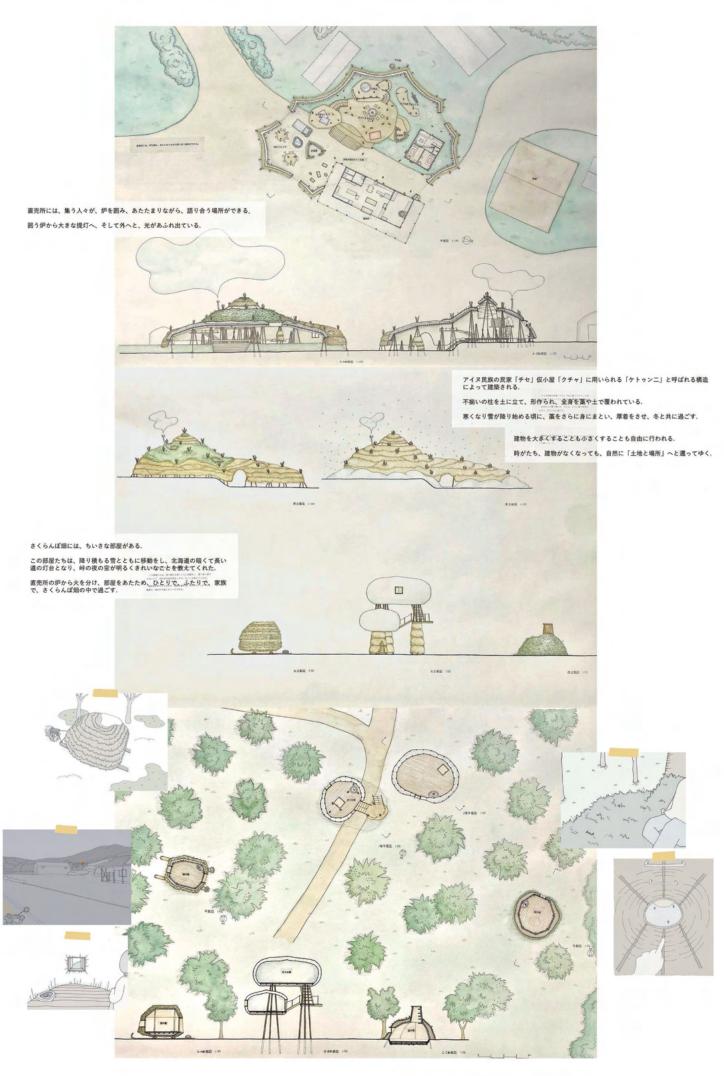
「土地と場所」を大切にしたい。

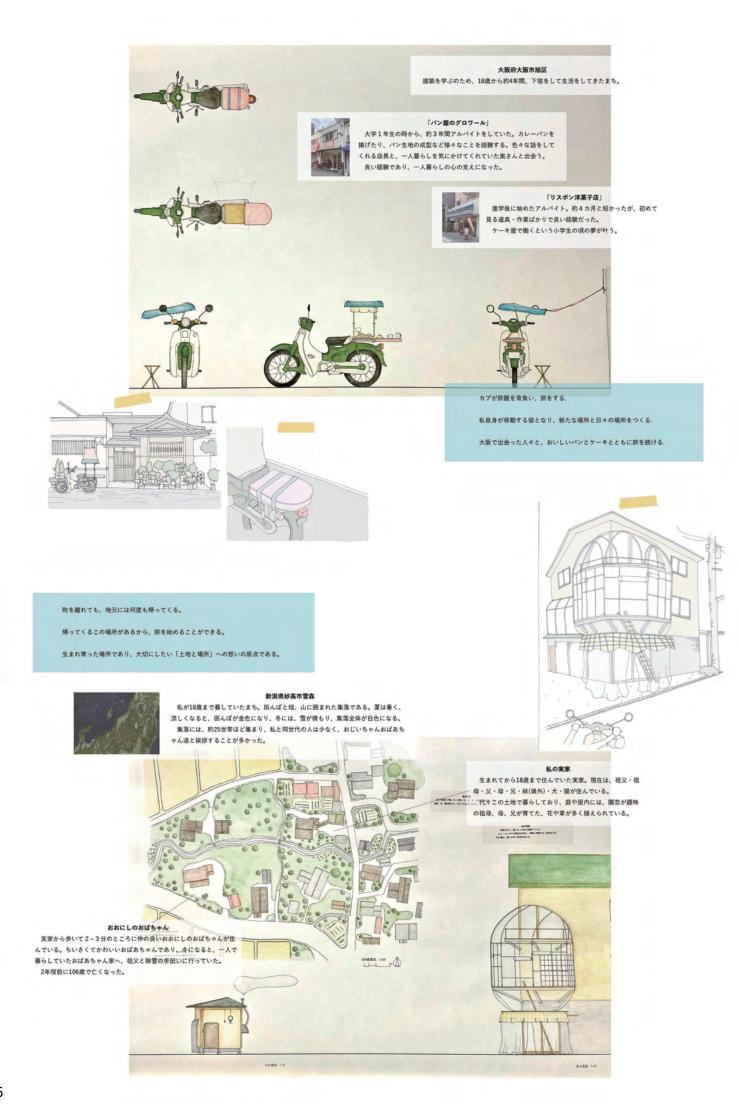
久しぶりに地元へ帰ると、山の上に見たことのない建物が建っていた。いつもの山は変化し、大切な「土地と場所」の小さな変化はこれからも続いていくと感じた。 「族」は、私に新たな、または、日々の場所と、そこに集う人たちとの出会いと関係を与えてくれる。この出会いと関係が、私が大切にしたい「土地と場所」である。「土地と場所」を大切にするためにできることは、「ちゃんと見る・覚えておく・思い出す」ことだと私は思う。「族」を、つまり私が生きてきたことを「記憶」すること。私の「旅」はこれからも続いていき、そして「記憶」のなかを旅し、「記憶」のなかに建て「記憶」を更新すること。「記憶」のなかの「想像と創造」が、私にとっての建築である。

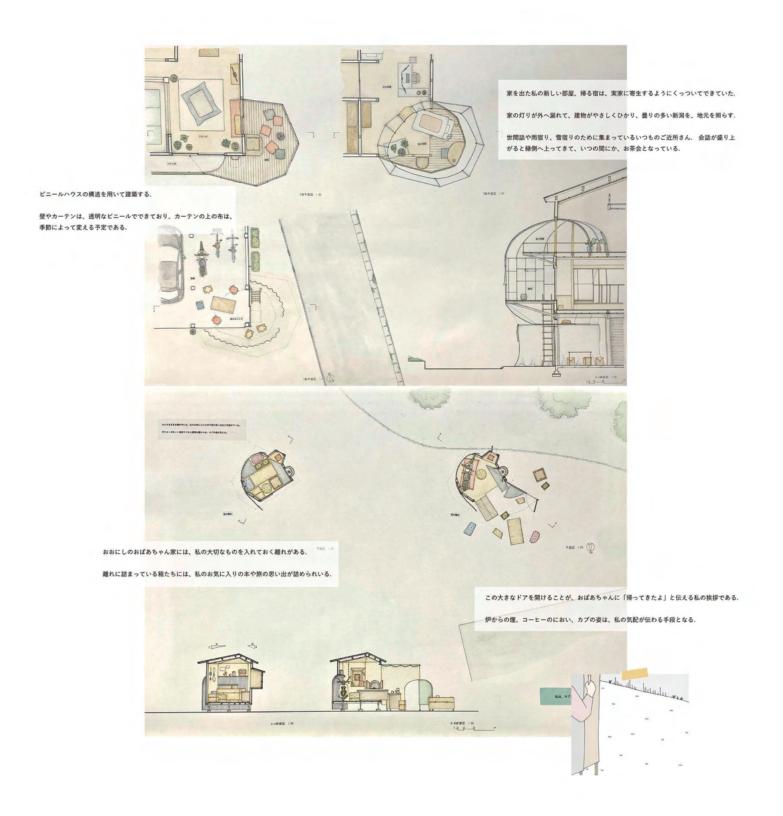
「記憶」のよりどころを"宿"として、繰り返し帰る旅の宿を建築する。









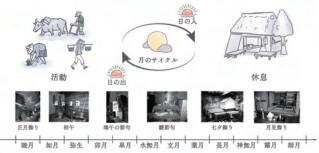


私は、カブとともに旅を続ける. —



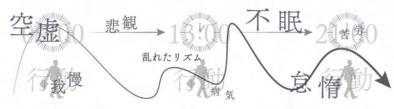


かつての生活リズム



人は自然と共に生活していた。太陽が昇れば人は行動し始め、太陽が沈めば人は休息していた。 電気や電灯がなかった時代、太陽だけでなく月の潰ち欠けにも意識を向け、そのサイクルを利 用した「旧暦」がかつての生活に根付いていた。月を中心に捉えた生活により、自然のリズム に調和した営みが可能だった。

現代の生活リズム



現代ではこの「旧暦」は表舞台から消え、自然のリズムへの意識が希薄になっている。電灯や電化製品の発明により、 生活環境は大きく代わり、日没後でも行動ができるようになった。その結果、多くの人々が深夜まで起きている傾向 にある。

特に日本人は生活リズムが乱れており、この乱れが睡眠不足や食欲不振などの問題につながっている。現代社会の 便利さと快適さは大きな進歩だが、同時に生活リズムの乱れを招いている。

現代の課題と今後の生活リズム





人々は月に寄り添った生活を営んでいたが、現代ではそのつながりが薄れつつある。現代社会において、生活リズムを乱れたまま日常を送ることは本当に良いのだろうか。





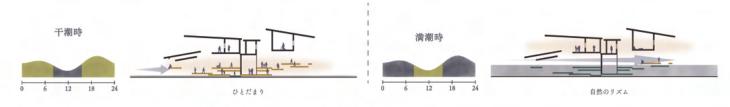
現代社会において生活リズムを整えることが難しい状況である。しかし、もう一度月に寄り添った生活を取り戻すことで自然のリズムと調和し、人とのつながりが生まれる生活リズムを 単等けるようになる。これこそが、最も自然で健康的なリズムではないだろうか。

敷地周辺と人の関わり



敷地は広島県廿日市市である。この敷地の大野棚戸では、約 2.5m 以上の差の潮の満ち引きが存在する。敷地周辺には地域住民、旅行客、漁民が互いに干渉することはなく、分断されたコミュニティーで暮らしている。分断されたことによって、生活リズムが乱れていることに気づかない不規則民も存在する。

月と密接に関わりのある潮汐



月の満ち欠けと密接に関わりのある潮汐(潮の潰ち引き)を活用し、潮汐リズムに合わせた、新たな生活リズムを提案する。

潮汐とは月に影響による潮の満ち引きのことで、周期的に干潮と潰潮を繰り返す自然現象である。この<mark>自然の営みと沙のサイクル</mark>を取り込み、<mark>月を感じる生活を</mark>より身近に意識させる。社会環境で引き起こされる 生活リズムのずれを整えながら、過去の知恵や自然のリズムを再評価する。そして、 潮汐により地域住民を巻き込み、交流を通じて自然に寄り添った生活リズムを取り戻すことを目的とする。



海、月、人という 3 つの要素を融合させた建築空間を創出する。月の満ち欠けと潮汐のリズムを取り入れ、一つの場所で、3 つの要素が生み出す空間の変化を体験することにより、人との関わり方に新たな次元を もたらす。この潮汐リズムに調和した空間は、従来の建築にはない独自の機能を備えている。

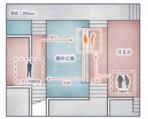


構築した建築空間の配置

人と空間の相互作用、自然と潮汐の関係性を考慮し、最適な配置を検討した。潮汐による空間配置や月明かりが人々に自然のリズムを認識させる。

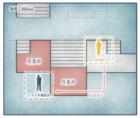






不規則民が子どもたちと水遊びをする。少し水が潰ちた床と月明かりが自然の時間を感じさせ、広場を中心に海が潰ちていく。





昔から月を祭る風習があり、お月見が盛んに行われていた。<mark>月と共に生活していた日本人のふるまい</mark> を感じさせ、不規則民の生活に取り入れる場となる。





カフェをオープンするために廿日市市に来た移住者。コーヒーの良さを知ってもらうために屋外で コーヒーを提供し、コーヒー好きな不規則民と交流する。





廿日市市の特産品を食べることができる。<mark>目の前の海と宮島</mark>を眺めながら食事をすることで心を安ら げる。





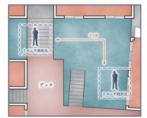
地域住民も利用できる休憩所。<mark>普段から人と関わりを持ちたい不規則民</mark>が地域住民との会話を通じて 日頃のストレスから開放される。





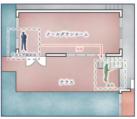
海を眺めることができ、<mark>月光裕ができる</mark>裕場。地域住民も利用することができ、不規則民との交流が 増える。





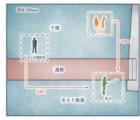
不規則民が必ず通る中央デッキ。不規則民同士がすれ違い、立ち話をすることで<mark>お互いに悩んでいる</mark> こと打ち解けあう。





浴場から出てきた不規則民がクールダウンするスペース。仕事終わりに訪れる漁民も利用できり ラックスしたひとときを共に過ごす。





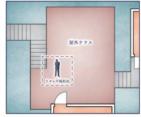
干潮時に現れる干潟。高齢化で漁場の管理が難しくなっているが、不規則民や地域の子ともたちと 共同作業をし、きれいにする。





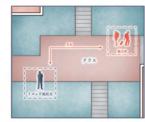
富島の砂でしか作れない焼き物。実際に砂を取り、焼き物を作る過程を知る。人々にお砂焼きの魅力を伝える。





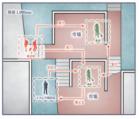
夜風に当たりながら読書をしたい不規則民。<mark>月の明るさが時間を忘れさせ</mark>リラックスした状態で本 を読むことができる。



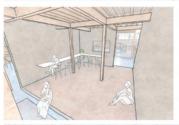


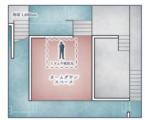
昼根により表れる月影が自然の時間を伝える。テラスに来た人々は月影を五感で感じながらゆっくりと漂う時間を過ごす。



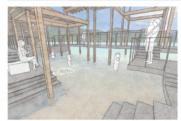


薬物野薬の栽培が盛んな廿日市市。食生活に関心がない不規則民が農家と繋がり、調理方法など教





社会環境から少し離れたい不規則民。通路が満ちたことで孤立された場所がその人のブライベート 空間となり、1人の時間を過ごす。





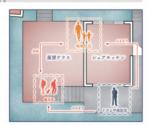
海のさざ波音と月明かりを感じることで不規則民は日頃の自分を忘れ、自然の時間を体感することができる。





廿日市市を拠点にする学生中心の劇団が演劇をする。不規則民は芸術を堪能し、演劇が終了する頃に は潮が満ちていく。





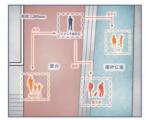
キッチンで作った料理を月を眺めて食べる。不規則民は月光を感じつつ<mark>月影は食事をする人に癒しを</mark> 与える。





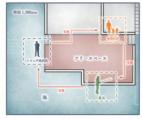
回避性のあるデッキ。干清と 1F の賑わいを上から覗くことができる。不規則民は無意識に潮の清ち 引き感じ取り行動する。





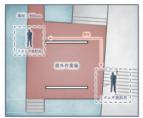
不規則民や地域住民が一体となって屋台を開く。日常の仕事とは違うことをし、潮汐の変化を見ることで癒しを感じつつ、仕事のやりがいを改めて感じる。





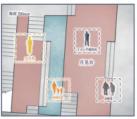
海を盛じながら穏やかな時間を過ごせるスペース。休憩をしに来た漁民や不規則民が会話をしたり、 ご飯を食べたりと様々な用途で利用される。





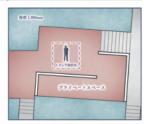
魚の下処理や DIY などできる作業場。釣り好きやものづくりが好きな不規則民同士が集まり、作業 を通して親睦を深める。





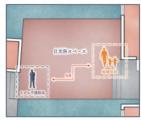
屋根の隙間から月を眺めることができる月見台。<mark>月に照らされた水面</mark>は月光浴に最適で自然と人が 集まる場所となる。





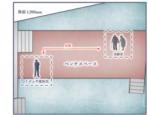
壁に囲われ、海方向へ視線を抜けるスペース。人の視線が気になるが、外で過ごしたい不規則民が この場所でのんびりと過ごし、気持ちを整理する。





日頃の徹夜で夜眠れない不規則民が日光浴するスペース。太陽の光を浴びることで体内時計をリ セットする。地域住民との交流も生まれる場となる。





世間話をしたい不規則民が高齢者と関わる。将棋をしたり、たわいもない会話をすることで時間を 窓れながら一日を過ごす。





廿日市市の伝統工芸品として有名な宮島細工。不規則民は伝統を知りながら、人と交流し多くの人 に宮島細工を知ってもらう。





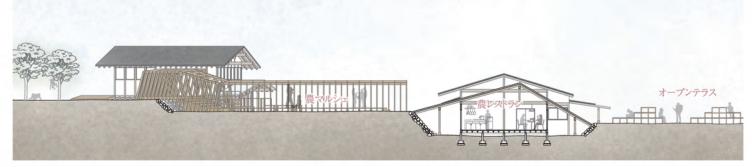
不規則民が<mark>地域住民から教わった料理</mark>を作って食べる。地域住民や観光客と同じ空間で食べること で充実した食生活ができるようになる。





廿日市市の由来になったはつかの市。不規則民は手伝いを通し、地域の良さを知る。人の活気が生 まれる場所となる。

獅子と境棲する集落



01 消滅する緩衝空間と生じる軋轢

住する人里を隔てる緩衝空間の役割を担ってお 境界線をつくり野生動物を追い出してきたが、野 り、野生動物と人間は棲み分けができていた。し かし近年、農業の衰退により耕作放棄地が増加し 係を築く必要があるのではないか。野生動物の行 たことで獣害が問題化している。その結果、人間 動特性から人間と野生動物の境界線を再考するこ と野生動物は互いに害を与えあう関係となった。とで境棲を可能にする建築空間を提案する。

02 境棲を可能にする建築空間

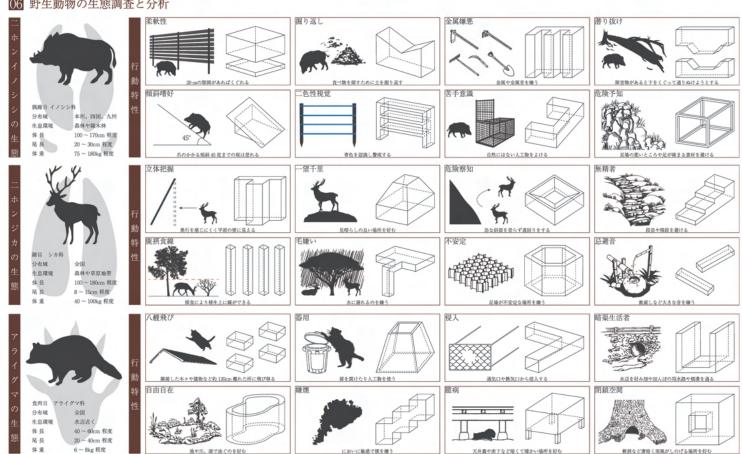
田畑は以前、野生動物が生息する自然と人間が居 これまで、人間の主観的な視点から野生動物との

03 敷地:京都府京都市北区上賀茂赤尾町



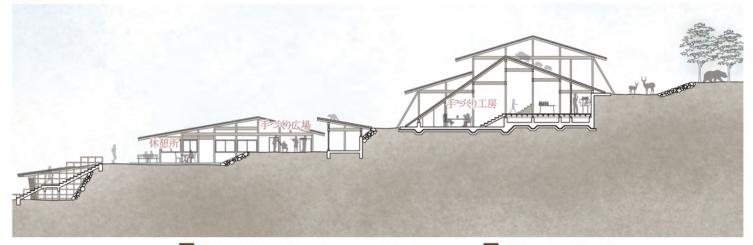


06 野生動物の生態調査と分析



人間の振る舞いの抽出





ここでは、300 年以上続く農家による 野菜の行商が行われており、地域コミュニティと地産地消が根付いている。 しかし近年、農家の減少に伴い耕作放棄 地が増加したことで、野生動物による 獣害の問題化と地域コミュニティの希 連れに終まされている。

04 敷地:生息する野生動物の調査と分析

ここでは、300年以上続く農家による ヒアリング・痕跡調査により生息する野生動物の分布図を作成する。





05 敷地:人間の動線調査

調査によってピックアップされた上賀茂にゆかりのある地域住 民、学生さん、観光客の行動分布図を作成する。分布図をもと

に配置計画を行うことで、人間と野生





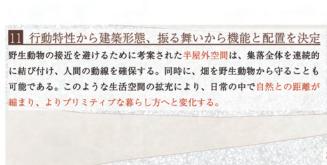




館棚によって森の中に光が差し込む

80~150kg 程度





農家住宅×下宿

学生が下宿することができ、集落特 有の暮らし方やコミュニティを知る。

桜広場

桜広場は年に一度の桜の開花時期に合 わせて花見客と地域住民が集い賑わう。

猟師住宅×ジビエ

宿泊に来た観光客がジビエ料理を食べたり、 狩猟体験をすることで野生動物を知る。

展望デッキ

観光客は農業体験や野生動物観光を通して地 域住民と交流することで、伝統文化を学ぶ。

安全的中央的设计和外发的一条的设计和平文个 **有多种水果等有**有效的方式。在多种水果或类 オープンテラス

農レストランでテイクアウトした商品をテラス席で食べる。畑で農作 業をする生産者との交流が生まれ、「食」と「農」を楽しむことができる。

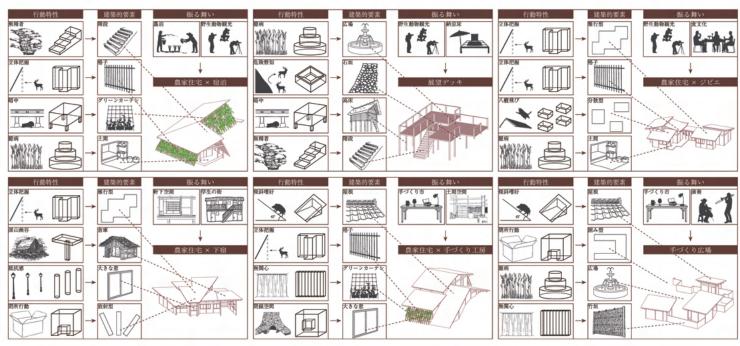
从外关系从外的关系的一种发展的影响并发展

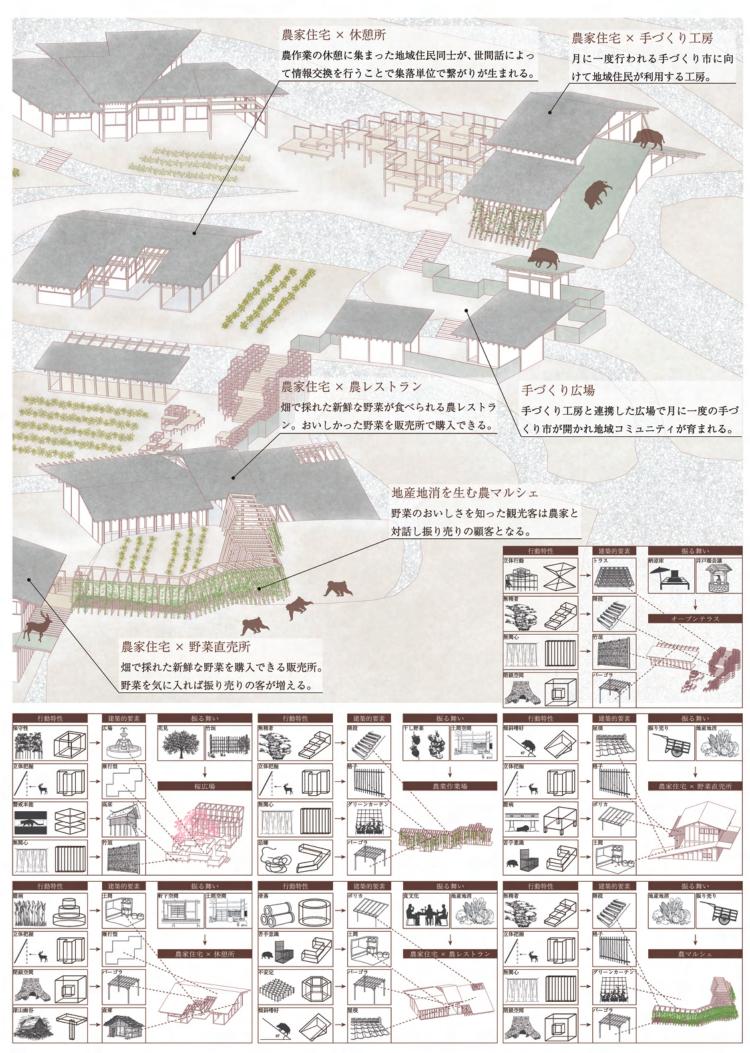
農業作業場

グリーンカーテンのかけられたパーゴラによって、畑を野生動 物から守っている。野菜を干したり、休憩所として利用される。

農家住宅×宿泊

観光客が農泊体験や野生動物観光に 来ることで、この地域の伝統を知る。





七音相の再配符

I すぎやまこういち

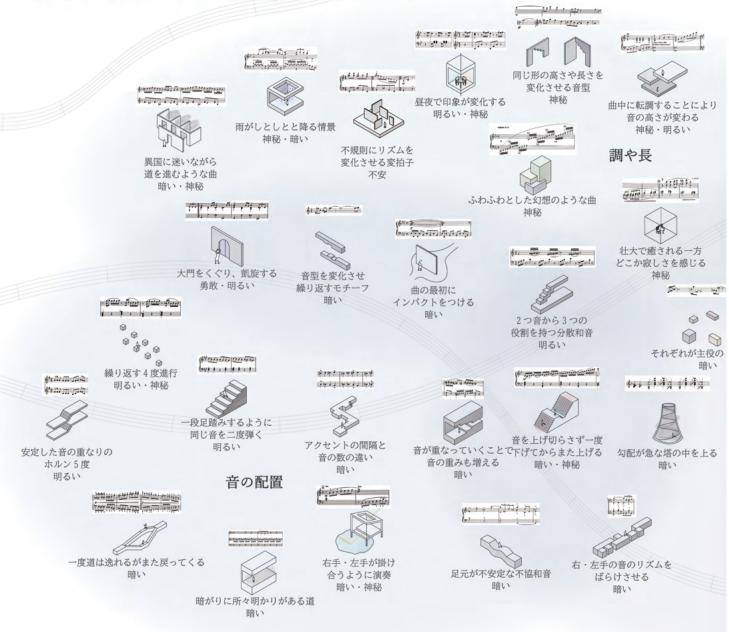


すぎやまこういちは、1931 年に東京市下谷区 (現在の台東区) で生まれ、歌謡曲、CM 曲、ゲーム音楽などの数々の名曲を生み出した作曲家。2016 年 9 月 6 日に行われたコンサート中にサプライズとして、「世界最高齢でゲーム音楽を作曲した作曲家」としてギネス記録を受賞。ピアノも弾けないゲーム好きの少年が、音楽への情熱だけを頼りに作曲としての道を進んだ。中学校の 3 年間で彼が独学でクラシックを学び、彼は感受性が最も重要な要素であると考え、定期演奏会に足を運び、クラシック音楽に触れることで感性を鍛えた。彼が生涯で作曲した CM 曲は 2000 曲以上に及ぶ。2021 年 10 月 7 日に、敗血症性ショックの合併症により、享年 90 歳で亡くなった。彼は普段音楽演奏会に足を運ばないような子供でも、自身の曲のために演奏会に来てくれることをとてもうれしく思っており、だからこそ子供達でもハーモニーの楽しさを感じ、音楽的感受性を養えるような曲を意識して作曲していた。そして、それらの音楽は今も多くの人々に愛され、その功績は日本音楽史に深い足跡を刻み続けている。

IV 音相による分類

すぎやまこういちは、音楽を創作する際には景色や映像を心に浮かべ、それをもとに技法を使用し作曲する。彼の作曲プロセスから得た要素を、楽譜、音楽、そして彼の創造的な技 たそれぞれの音楽は、音の響きから明るい、暗いなどの感じ方が異なる。この音楽の違いをここでは、「音相」と呼ぶことにする。これらの音楽の技法を音相とリズムのグラフに配置する。 ジを音相に合わせて配置し、技法をグループ分けする。

技法から読み取れる言葉を用いて、グループごとに空間を再構築することで、建築の形を生み出す。

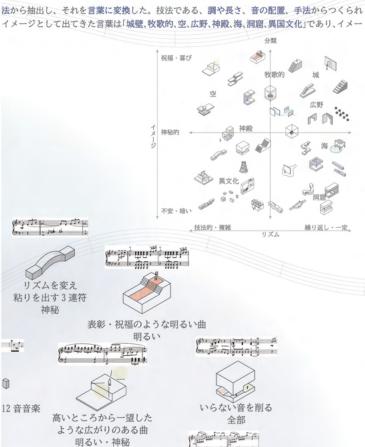


Ⅱ 東京都東京市台東区

敷地はすぎやまこういちが生まれ育った台東区(旧下谷区)とする。台東区は、北西 部には上野恩賜公園を中心に芸術が集まった場所がある。音楽においては、日本最古 の洋式音楽ホールである、旧東京音楽学校演奏堂が存在し、その卒業生には瀧廉太郎 等がいる。また南東部には多くの寺院などが点在し、観光スポットとして国内外から 有名である。中部には劇場、南部には博物館等がある。しかし、芸術や歴史があふれ る台東区の中でも、今回の敷地である北東部は、ホームページにおいても特に観光ス ポットとして紹介されていない。そのため魅力的であり、観光スポットとなる建築を かつて栄えていた"いろは商店街"のあるこのエリアつくる。



イメージとして出てきた言葉は「城壁、牧歌的、空、広野、神殿、海、洞窟、異国文化」であり、イメー



上がった先に tr. の美しい響き

明るい

אַ עָּבְּיִהַ בְּיִבְייַרַ וְ

楽器の違いが雰囲気の

違いを表す

神秘・明るい

Aun aun a

風が通り過ぎる

ような涼やかな曲

明るい・神秘

うねる線を描く

ようなメロディー

暗い

00

CHARLEST TO THE

暗い、不安げな曲調から 神秘的になる 暗い・神秘

Ⅲ リズム・明るさ

いろは商店街の通りを横軸とし、東西を人々の生活リズム、南北を歴史や情景を中 心に考察する。まず、東西について、東部は主に簡易宿泊施設が多くを占めており、 人々の生活リズムが複雑だといえ、西部は住宅や事務所が並んでおり、人々の生活 リズムは比較的一定だといえる。次に南北については、北部は荒川区の南千住に隣 接しており、江戸時代に三大刑場と言われる小塚原刑場があった歴史的な地域であ る。少し暗い歴史があり、"歴史には沢山の血が刻まれている"というセオリー通り の重要な歴史スポットとなっている。南部は瀧廉太郎作曲"花"の詩にも登場する 隅田川が流れており、その美しい景色や明るい情景が詩に描かれている。南北を縦軸、 東西を横軸とし、敷地の歴史、生活、風景などからそしてそれぞれ縦軸を明るさ、 横軸をリズムに例えて表す。



音楽 × 〇〇

今回の建築はすぎやまこういちの曲を耳のほかに、実際に建築で彼の音楽を体感す ることができる。音楽から抽出された空間に、音楽を聴きに行くことが第一ではなく、 その場所での活動をしていたら自然と音楽が聞こえてきた。と、目的の活動をして いる際に聞こえてくることで、より多くの人の耳に彼の音楽が残る。

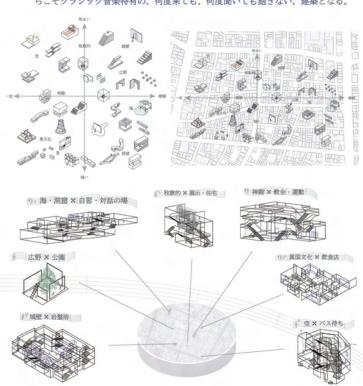
彼の音楽を聴きたい子供の場合、落ち着いて何時間も演奏会で静かにしていること は難しい。しかし、遊んでいる場所で彼の音楽が聞こえてくると、好きなことをし ながら好きな曲を聞くことができ、また彼の音楽に興味のない子供は、自然と音楽 的感受性を遊びながら無意識的に学ぶことができる。彼が作曲時に意識して取り組 んでいる、音楽的感受性をこのような形で養うことができるかもしれない。





VI 音相とイメージの配置

配置する場所とイメージはグラフに分類したものを、地図にあてることでどのグルー プをどこに置くかを決定する。用途は、その場所に元々あったものや、イメージや 音相から連想される行為をその建築の用途とする。それぞれの場所で行う行為、演 奏される音楽、雰囲気等が全く異なり、同じ場所でも同じイメージからつくられる 音楽は数十曲に及ぶため、時間や日によって聞くことができる音楽は様々だ。だか らこそクラシック音楽特有の、何度来ても、何度聞いても飽きない、建築となる。



⑨→海・洞窟×自習・対話の場 奥に行くほど、暗く、静かに 右手・左手が掛け 雨がしとしとと 合うように演奏 降る情景 音型を変化させ 曲の最初に アクセントの間隔と 繰り返すモチーフ インパクトをつける 音の数の違い 海×自習室 洞窟×対話の場 度道は逸れるが また戻ってくる 暗がりに所々 うねる線を描く 足元が不安定な ていくことで 音が重なっ 明かりがある道 不協和音 ようなメロディー 音の重みも増える

地上階が自習室、地階が対話の場となっており、どちらもエントランスから奥に行くほど静かに、暗く深くなっていく。



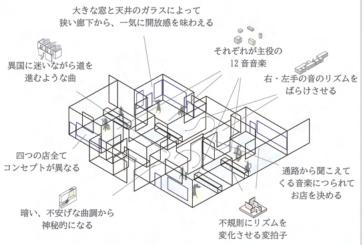
教会を運動の動線よって削り取られ、ガラスで隔た







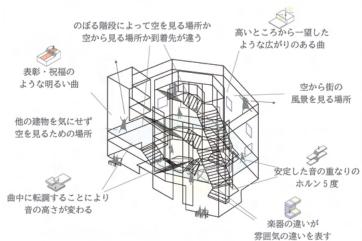
9:▶ 異国文化 × 飲食店



何が食べたいか迷ったときは、ここにきて好きな匂いと音のする場所に足を運ぶ。

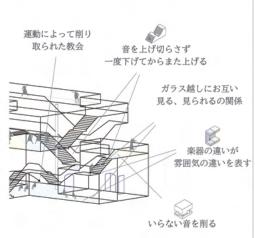


空メバス待ち



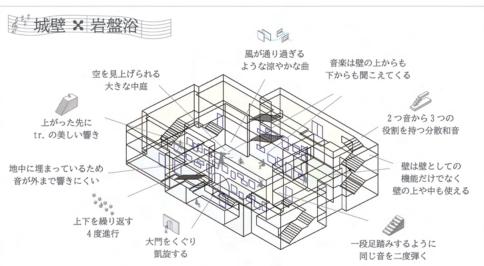
二重螺旋階段のどちらからのぼるかによって、空を見るか空から見るかが異なる。





れているためお互いが見る・見られるの関係である。

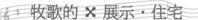


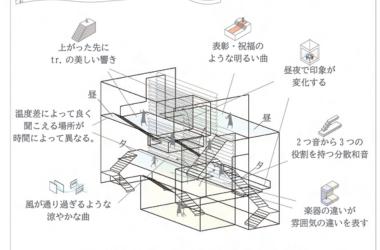


壁を隔てるモノとしてではなく、中の空間や壁の上を利用した建築。岩盤浴と中庭が地階になる為、騒音も軽減される。



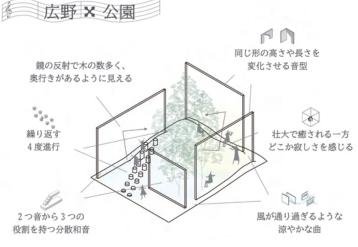






昼夜の温度差を利用し、音楽を聞く場所を変化させ、また来 館者からの目線を遮るルーバーを使用した、住宅兼展示場。





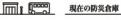
壁の内側に鏡をつけることで公園内の木々が反 射しあい、奥行きのある広野のように思わせる。





1995年の阪神淡路大震災から今年で 29 年がたった今、 地元神戸の住民たちの災害への意識が薄れつつある。 しかし、東日本大震災の地震を経験した私はこの状況に 危機感を感じ、建築によって人々に自然災害の恐ろしさと 備えることの大切さを忘れないようにできないかと考えた。 今でも、日本中では様々な災害が起き、西日本では南海ト ラフ地震による大きな被害が予想され、防災への意識を高

めることが必要なのである。 そこで私は、教助作業や一時避難場所のための物資が保 管されている防災倉庫に注目した。



現在の防災倉庫は外見はシンプルで鉄の箱のような見た 目をしているためあまり目立たず、町中にある清掃用倉庫 などとも見分けがつき辛いため、防災倉庫は人目につか ず、防災倉庫を見たことがない若しくは防災倉庫だと認識 されていないことが多い。

さらに、倉庫の中に何が入っているか分からない場合が 多く、『防災食庫ガチャ』と言われる、防災食庫の中身が 実際に開けてみないと分からない問題が起きてしまうので

そのことによって、災害時の対応に遅れが出てしまい十 分にその役割を果たせていない。



目指すべき防災倉庫の姿

背景



防災想定



防災倉庫を市民の目の届くところにおくことで今まで注 目されてこず、デザイン性のなかった倉庫に新たな役割を 持たせる。そして、市民が交流を深める空間を同時に計画 コ し、防災倉庫を地域の新たなコミュニティをつくる場とし て周辺の風景の一部となるような建築とする。

そして災害時には救助避難所や復興の拠点となり、迅速 な救助作業、復興作業に貢献する。



神戸市は北の六甲山脈と南の瀬戸内海に挟まれた東西に 細長い政令指定都市である。

そのため、山では土砂崩れ、街では火災や川の氾濫、海 では高潮や津波など様々な自然災害に見舞われる。

さらに、神戸市内の人口は150万人と全国で六番目に多 く災害が起きた際の被害も大きくなりやすく、被害を小さ くするためにはそれぞれのは 災への意識が必要不可欠である。





防災倉庫を人々が頻繁に利用し、町中に点在する

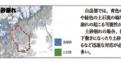
と掛け合わせることで、防災倉庫の存在とその役割を市民 に認知してもらう。 さらに、その防災倉庫に周辺環境や施設と関係性を持た

せて計画することで、そこがコミュニティスペースとなり 人々が集まるコミュニケーション空間となる。

そして、災害が起きた時には各防災倉庫が救助と復興の 拠点となり、パスの路線はパス停と各避難所を結ぶ役目と

そのことにより、物資の運搬や被災者の救助、怪我人の 搬送など敷地周辺だけでなく、他の場所からも支援を行う ことのできる円滑なサポート体制を形成する。





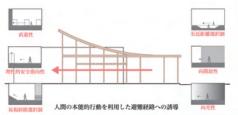
0.5m 未満に想定されているためそこ



海側では高振の可能性があり、図 の赤色に近くなる程高い高潮を想定し ていおり、路線上では高いところで高 瀬5m を想定している。 5m まで海道が上がると住宅の1階

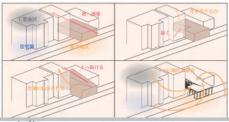


バス路線の南東側では高い場所で 2.0~3.0mを想定している。 海海トラフ地震が起きた場合、高い 可能性で津波が起こるので、津波へ

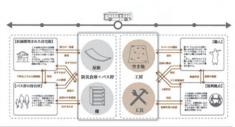


想定している災害と避難行動

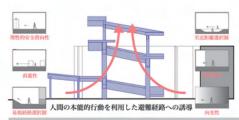
津波や高潮に考慮し、敷地裏の避難場所へ誘導するように設計する。そのため、大通り側 から、敷地裏に向けて開けた明るい空間となるよう、屋根の大きさをグラデーション的に変 化させる。



防災倉庫とおすそ分け空間を融合し、バス停周辺の目立つ場所に配置することで、気軽な アクセスと視認性を確保する。また、適常は閉鎖的で暗い印象の工場や工房を、オープン にして、日常利用と緊急時の両方に対応する多機能な公共空間を創出する。

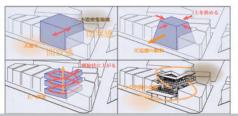


この地区は、区画整理により伝統的な下町の雰囲気からニュータウンのようなきれいな街 へと変数を遂げた。その変化を踏まえ、地域コミュニティの絆を保持するために、住民が互 いに物を分け合える(おすそわけ)コミュニティスペースと、ものづくりを体験できる工房を設 けた。

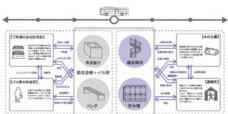


想定している災害と避難行動

津波や高潮の可能性と周辺に避難場所がないことを考慮し、津波タワーを設計する。この 本遊密集地域における津波タワーは、開放的で明るい空間を提供し、人々を自然に誘導 するデザインが採用されています。建物内部からほどの方向からも螺旋階段が見え、非常 時にこの場所が運難場所であることが人々に認識されやすいデザイン。

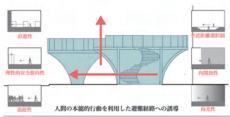


周辺の長屋は大通りと裏手の木造密集地域の住宅街を分断しているため、この二つの 間をつなて建築を計画する。さらに、建物の形状を階段と共に螺旋状に設計することで、 屋根に落ちた雨水が人々の導線とともに下に流れ、貯水槽に貯められる。



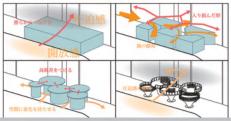
プログラム

道路側は大きな道路や公園、大型商業施設などがあるのに対し、敷地の裏側は昔ながら の下町地の残った木造密集地域になっている。対極的な二つの風景をつなてと同時に、 雨水をためながら、ろ過する継楽を提案する。水と下町の空間は人々の憩いの空間になり 、心と体を載す。



想定している災害と避難行動

高層建築物が近接する地域において、地震や火災によるガラスなどの落下物に対する防 護を目的としている。また、敷地の後方に位置する新湊川の沿艦リスクに対しても、このデッ キは避難絡まび避難場所として機能し、川の氾濫時には、住民が安全に避難できるスペ ースを提供する。



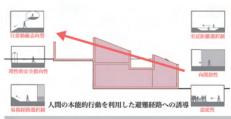
コンセプト

ビル風を防ぐために入り組んだ形状とし、人の動線によって削られた部分を柱として利用 する。さらに、デッキは柱と滑ちかにつながり、用途ごとに分割する。それは空間に変化 をもたらし、安全かつ快適な環境を提供する。



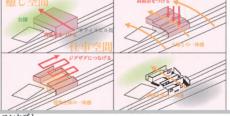
プログラム

トラース 財職場における自転車の集積が都市景観を損ね、さまざまな問題を引き起こしている。その解決策の1つとして、学生や社会人が気軽に利用でき、不要になった本を寄付できる本棚を備えた図書館デッキを提案する。人々が安心して空き時間を過ごせる公共空間として



想定している災害と避難行動

周辺には学校や病院など避難場所になる施設が点在しているため、災害時にはすべての 避難施設の支援物資を供給したり、料理を振る舞うなど、人々のケアを行う場所として利 用される。



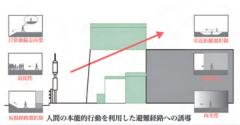
コンセプト

この計画では、公園へのアクセスを提供する階段と公衆トイレを統合し、公園との一体感を強化する。建物は石垣の形状に合わせて段状にし、空間が連続的に折れ曲がった壁で各階を繋げる。



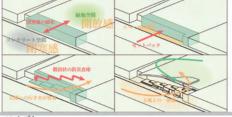
プログラム

時間帯によるターゲットの変化に対応したシェアキッチンを計画し、基、夕、夜それぞれで 用途が変化する。さらに、裏の駅を利用する人々や通学する学生たちが気軽に利用できる ような場所、そして公園へアクセスするための通り道になるように計画する。



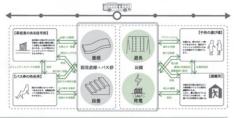
避難行動

周辺に広がる高低差のある住宅地から考えると、災害時における初期の避難場所としては この公園が非常に適している。特に、子供時代に親しんだ公園は避難場所として心理的に 適していることがある。そのため、住宅街の閉葉感のある空間から開放空間の公園へ誘導 する。



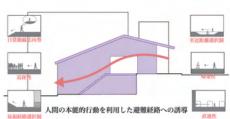
コンセプト

防災倉庫を階段状に配置し、公園との流動的な接続を実現する。人々が多様な活動に対 応でき、また、土地がめくれ上がったような公園と一体化し屋根は、公園と建築の境界を 曖昧にし、バスを待つ人にも安心葱を与える。



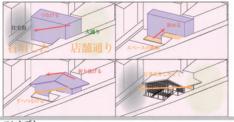
プログラム

閉塞感のある住宅街と公園の接続を強化し、バス停を憩いの場とし、災害時には避難施 設として機能する遊具を配置する。



想定している災害と避難行動

この高低差の激しい地形は土砂耐れの危険を孕んでおり、災害発生時の安全確保のため に、敷地裏の安全な建築物への誘導路を確保する。また、遮隔地の避難所への経路も整 備し、災害対応能力を高める。



コンセプト

建物の壁全体を商品標とし、その一部を防災倉庫として利用する。商品を見ると同時に防災倉庫の中身も確認できる提案。敷地裏の石垣下の空き地につなげる計画。



プログラム

閉店する店舗が増える中、店主と客が交流できる空間を提供し活性化をめざす。固有の風景を活かし、大規模な商品棚を設置することで、商品を展示し、防災倉庫と併設することで、この通りの魅力を再び引き出す。







00. 背景 | 備前焼の歴史

日本人にどの「焼き物」を知っているか、「焼き物」と言われてどんなもの想像するか、と質問した際に、多くの人が有田焼と答えたり、ツヤツヤしているもの、素敵な絵が描かれているものと答えるだろう。数ある焼き物の中で、日本六古窯の一つに数えられ、千年の歴史を持つ備前焼はほかの焼き物とは違い、釉薬を一刻使用せず、1200~1300度の高温で焼成する焼締め陶。土の性質や、窯への詰め方や窯の温度の変化、焼成時の灰や炭などによって生み出される備前焼は、一つとして同じ色、同じ模様はなく、「ザ・土」の焼き物であり、これこそが備前焼の最大の魅力なのだ。

かつては、民衆の生活に必要な焼き物として扱われ、実用品の備前焼として大量に焼かれ、 日本各地へと普及していった備前焼だが、備前焼とはまったく違う白い肌の有田焼などの 磁器の出現により、磁器がセンスあふれた都会の娘だとすれば、備前焼は垢抜けのしない 田舎娘になってしまった。それからというもの備前焼は、実用品に代わって置物が中心と なり、人々の生活とはかけ離れた存在になってしまった。

01. 現状課題 | 3 つの問題

陶器ゴミ問題



備前の土は、焼成すると大きく 縮む。そのため、窯焚きの後は どうしても廃棄が1割以上出て しまう。備前に限らず、焼物の 産地では土が有限なのに対し、 陶器ごみが増え続けることが社 会問題になっている。

原料の減少



備前焼の原土は伊部周辺の田ん はの地下にある粘土層で「ひよ せ」というものである。 「ひよせ」は年々少なくなってお り、備前焼がつくれるのはあと 100年も持たないと言われてい る。

後継者がいない



備前焼に対する関心が低下し、 備前焼を継承、維持するため の後継者不足が問題になって いる。親族内から、親族外か らの申し出などで後継者を確 保しているが、備前焼を未来 に繋げたいという人物が少な くなっている。

02. 敷地計画 | 岡山県備前市伊部

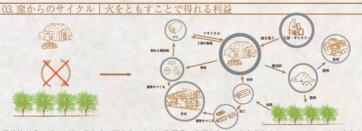






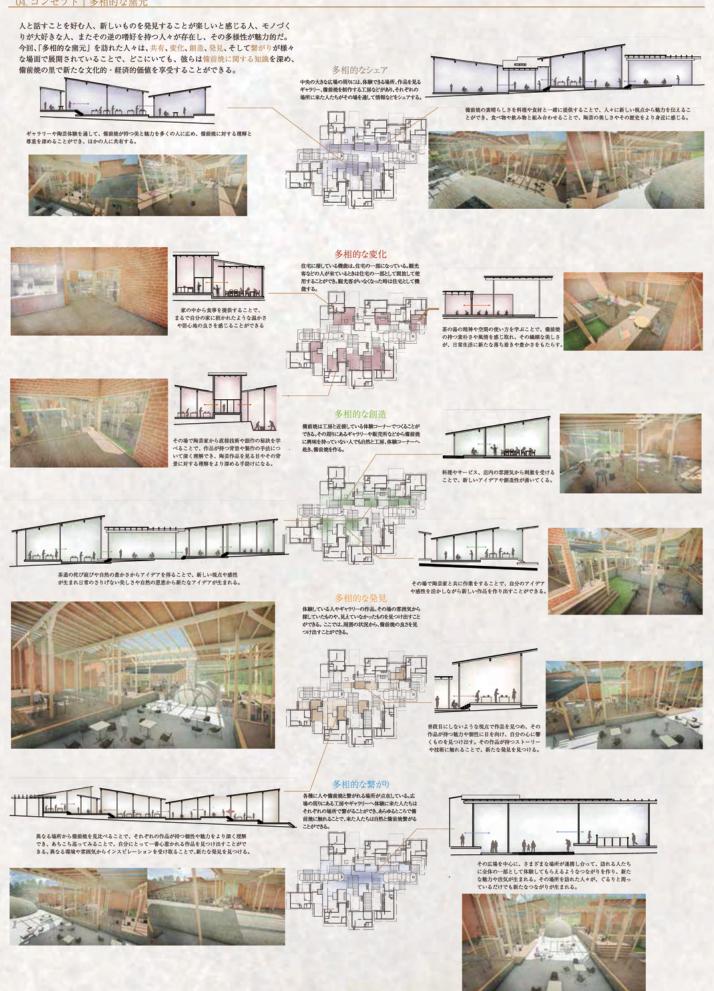


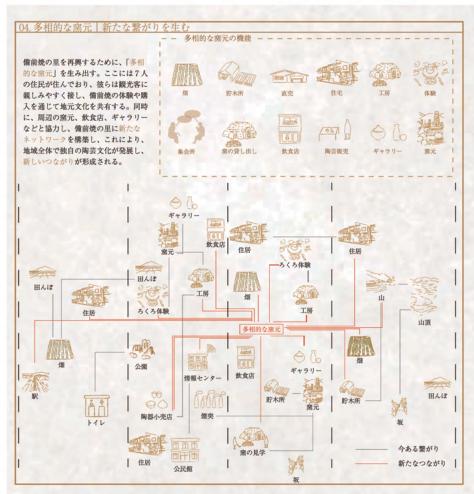
伊部町は日本六古窯の一つ偏前焼の産地として有名な町で、伊部駅周辺には窯元やギャラ リーが多く点在し、古き良き風情の残っている。ギャラリーや窯、お店が多く集まる備前焼 の里があり、散策すると備前焼で作られた案内板やレンガ造りの赤い煙突が目を引く。伊部 駅近くには備前焼伝統産業会館や備前焼ミュージアムもあり、多くのお客様が訪れ、毎年秋 に開催される備前焼まつりには焼き物愛好家の方たちが訪れている。



僧前焼が盛んだった時、登り窯は沢山あったが、陶器業の衰退とともに窯も少なくなっていった。窯に火をかけるとあまり良いイメージが沸かないが、窯に火をともすと陶器やレンガが生まれ、焼却灰より森や畑の肥料に代わる。また、木材やレンガで建物をつくるなどといったサイクルが火をともすことで生まれる。







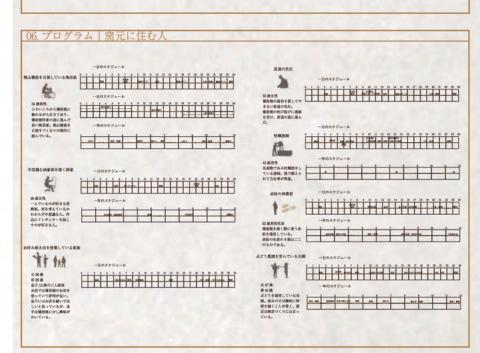
05. プログラム | 多様性 × イレギュラー=多相的

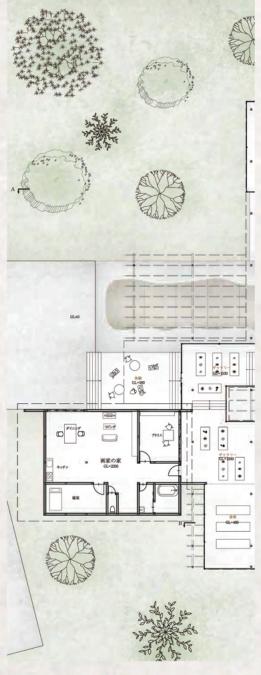
もともとはひとつの目的のためにつくられたはずなのに、いろいろな人が寄ってたかって同じ目的を違う解釈で捉えて物象化する ことによって、ある人にとってはこれが合理的、別の人にとってはこれが合理的という具合に、多様な合理性が合体した状態。

備前焼

窯の中は均一ではない。場所によって酸素が多く通るところ、届きにくいところ、湿気が集まるところ、それらの場所の特徴を捉えて、作品にあえてイレギュラーを起こす。現代の備前焼は個人作家が多いから均一性ってあまり求められていなくて、むしろイレギュラーをどう意識的に起こすかが大事。

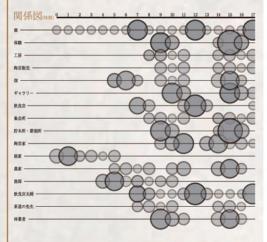
備前焼の最大の特徴はその「多相性」にあり、同じ作品が二度と再現されることはなく、その多様性がむしろ魅力となる。「多相 的な窯元」はこの特性を活かし、新たなつながりを生み出すと共に、独自の陶芸文化の発展に寄与する。さらに、創造性や共有、 変化を促し、地域の結びつきを深める提案となり、新たな文化的・経済的価値を享受する。

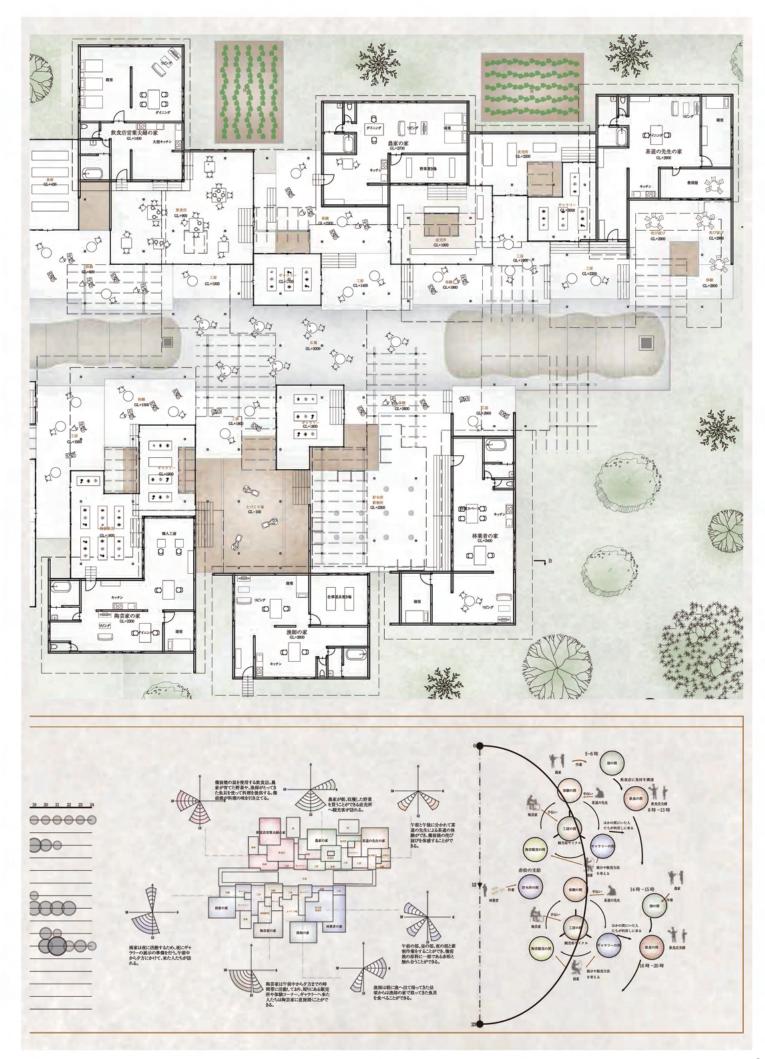




07. 時間ダイアグラム | 住民と機能の活動時間

窯元は時間帯によって使われる機能や住人が活動する時間が異なる。、住宅と一体化したスペースがあり、観光客がいる時間いない時間で住民と観光客が一緒に使ったり、閉鎖的な使い方ができる。





琵琶道中 山湖景路



これからの滋賀と滋賀での暮らしと働く場の在り方を考える。

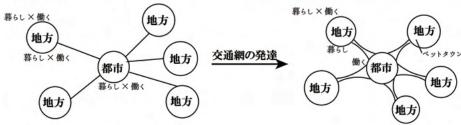
都市部を支えるための滋賀県ではなく地域のポテンシャルを活かし、琵琶湖汽船によって滋賀県を巡ることによって生まれる文化風景としての滋賀県を提案する。文化風景とは近代化になるにつれて切り離された風景を包括的な風景として捉え直すことを目的とする。

文化風景-人の営み、気候風土、地域性、見え

00_社会背景_合理化による「分断的風景操作」

現代社会の多くは合理化・効率化を求めて豊かさを得てきた。

主な要因として交通網があげられる。 交通網の発達によって暮らしと働くが分けられ、 私たちは 日々生活を送ってきている。 そして交通網の発達により大都市に働く人々が帰ってくるペットタウン が生まれた。 変遷を振り返ると、 近代化になるにつれて利益を優先し切り分けられた風景として 成り立ってきたと言える。



暮らしと働く場が混在していた

暮らしと働く場が切り離された

01_敷地_滋賀県

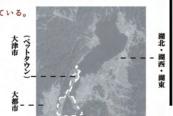
大津市

季節ごとに魅せ方を変える近江八景は情景として描かれているが、そこには人の営み・気候風土・地域性など 包括的な風景として成り立っていた。しかし、近代になって近江八景により端から端まで繋がっている滋賀県の 都市である大津市(湖南)は大都市との繋がりが強く、交通網の発達によりベットタウンとして有している。 それによる合理化・効率化によって近江八景は整備され、かっての美しい自然風景や風情豊かな風景は失われ てきた。滋賀県の都市として位置しているものの大津市は「核のない都市」とされている。

湖北・湖西・湖東

一方で、 滋賀県は地理的特性から周囲を標高の高い山に囲まれた内陸県としての側面を有している。 そのため、 他地方との繋がりが弱く開発から取り残された湖北・湖西・湖東では自然豊かな地方であり、

暮らしながら働く場が根付き、その土地ならではの歴史や文化が保たれている。



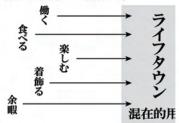
02_問題提起_滋賀県の将来像

交通網の発達によりベットタウンが生まれ、都市に計他地方との繋がりが弱いところではその土地ならでは歴史や文化が根付いているが、人口減少により歴まれる。今後、都市もまた社会状況を背景として者都市に隣接していることから都市の影響を受けやす変わっていくと予想される。ベットタウンの変化、ラポテンシャルを再定義する必要がある。



02-1_ライフタウン

ライフタウンとは、 従来のベットタウンの働きに行き 働きに行く中にも楽しみ喜びなどを持つものとし多れ 結びつく混在的な用途として構成する。



03_コンセプト_巡り移動する暮らしと働く場

本提案は、琵琶湖を巡り移動する暮らしと働く場をこれからのライフタウンの場には、働く場としての空楽しむ空間も含まれている。 同時に、琵琶湖を巡湖西、湖東の文化衰退を助け、各々の地域を豊い琶湖は人々を結び付け、地域を結びつけることとなて滋賀県が生まれる。

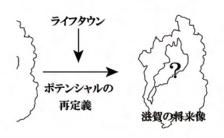


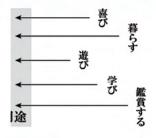
各々を結びつける

04-1_プログラム _ 琵琶湖と地域をつなぐ航路

季節労働と地域の特徴的な行事に着目しながら航 船によって運ばれることで、地域のポテンシャルを ポテンシャル同士を結びつける。それは大津の狭い 滋賀県全体として地域住民と繋がりながらライフを礼







:提案する。

を聞だけでなく、遊びや学びなどを ることによって大津だけでなく湖北、 かにする。 琵琶湖汽船によって、 琵 :る。 これらが包括的な文化風景とし



。琵琶湖汽船

格を設定する。 各地域のもの・ことが 増大させるだけでなく各地域で独立した 、範囲で終わるのではなく、 船によって 置ごす。



04-2_プログラム_登場人物

都市で主な労働を行いながら、 副業を働くだけでなく楽しみ学びながら働くことを 考える大津市民と各地域の地域住民に着目する。



大津市民

主な労働を都市で行いながらも楽しみ、 学びを得ながら副業を行おうとしている人。 後年、湖北・湖西・湖東に移り住もうとする人も含まれている。



各々の地域住民

地域を盛り立てより活気づけ、他地域の文化暮らしを楽しみとする人。

04-3_プログラム_計画地の特性と風景操作



04-4_プログラム _ 滋賀県の暮らしと切り離せない琵琶湖と周辺の山々

滋賀県の暮らし方は自然環境を利用しながら暮らしたり働いたりしている。 滋賀県の暮らし方として 建物内で完結するようなものではなく、包括的に外部環境などと結びついた暮らしとなっている。 以 上のことからガラスや壁で囲む建築ではなく、ガラスや壁も外部と関係を持ちながら自然環境と呼応 した囲まない建築として提案する。





















site01_海津大崎 民劇×桜



桜を保全しながら鑑賞する場として計画する。 地域で行われている民劇にとっても桜を舞台として使い、 地域が活気づく。







一 自然を背景にした民劇を鑑賞できる。

大津市民



桜と他地域から集まるもの、ことで民劇が繰り広げられる。

地域住民







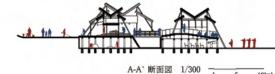
計画地の特性

約 4Km にも並ぶ桜が咲いている。桜だけでなく岩礁による 光と影のコントラストや夕日による琵琶湖にうつる水面の桜が 総合的に美しい風景を作り出している。

風景操作

うつす風景

敷地の風景のポテンシャルを引き上げる風景操作を行う。光と影の コントラスト、水面にうつる桜の影をうつし出す操作を行う。









site02_長浜 祭り×縮緬



伝統地場産業を手伝いながら織物で出来た着物や服を着て楽しむ場として 計画する。 着物を着て地域の長浜祭りに参加し滋賀の衣文化の発信拠点となる。







- 長浜祭りに着物を着て楽しめ、 衣に興味を持つ。

大津市民



縮緬により祭りや衣の文化が発信できる。

地域住民







計画地の特性

長浜風の心地よい風が吹いている。そして風による木のささやかな揺らぎ、 琵琶湖の静かな波が風景として映し出されている。しかし、のどかに広がる 土地に工場が転々と建つ風景が見られ、良き風景を疎外している。

風景操作表し消す風景

計画地の背景にある工場を消す風景操作を行いながら、長浜風のささやかな風を表現している木の揺らぎや波の表れを風景として作り出す。





site03_ 矢橋帰帆

ョシ工房×釣り



ヨシ刈りを行いながらヨシで出来た空間を釣り場やヨシ工房として 計画する。ヨシの自然素材に触れることが出来る。





ヨシの自然空間を堪能しながら釣りができる。

大津市民



_ ヨシの地域資源を最大限に活かせることができる。

地域住民







計画地の特性

ョシが広大に広がる風景が作られている。しかし、周辺にはイオンモールなど 商業施設が集まり、ヨシの風景を活かしきれていない。

風景操作 同化する風景 ヨシという風景を最大限に活かす風景操作を行う。





site04_大溝

発酵×スパ



棚田・湧水・内湖の土地の恵みによる大溝の食文化の生業を行い、 発酵文化 を手助けしながら食をいただく場として計画する。 マーケットとして他地域の名産 品も通しながら滋賀の食文化の発信拠点となる。





滋賀の伝統食に触れ合うことができる。

大津市民



発酵文化を主としながら他地域の名産品も通して 新たな郷土料理を学ぶことができる。

地域住民







計画地の特性

棚田・並木道・内湖と土地に恵まれ自然風景が映し出されている。 湧水や雨が多く降ることから霧が発生しやすく風景を作り出している。

風景操作

ぼかす風景

大溝の土地に恵まれた気候風土を利用しながらぼかす風景操作を行う。



A-A` 断面図 1/100 1 5 10(m)





│主催│大阪工業大学工学部建築学科││後援│大阪工業大学建築会・大阪工業大学校友会││TEL│06-6954-4206││HP│https://www.archi.oit.ac.jp	0
OSAKA INSTITUTE OF TECHNOLOGY	(
	Ŀ
	Ī